



# きらめきの活動を 紹介していただきました

6月12日に開催されました「第117回日本消化器病学会九州支部例会」にて、きらめきプロジェクトOGである臨床・腫瘍外科所属の永吉絹子先生が、九州大学病院の支援体制として、きらめきプロジェクトの活動を紹介していただきました。

June. 10-12 2021. 第117回日本消化器病学会九州支部例会

キャリア継続の架け橋に  
～九州大学病院きらめきプロジェクトの業績と今後の展望～

きらめきプロジェクトの取り組み

- 定期的なスタッフ交流
- 利用者ミーティング・ランチ会
- HP・e
- 年次報告書・情報発信
- 私自身のきらめきプロジェクトとの関わり
- 永吉 絹子 卒後17年目 医学博士
- 専門は 下部消化管外科 内視鏡外科
- ロボット手術執刀
- ジェンダー学講義
- 性差医学講義
- 啓発講演会
- 学生講演会・交流会

# きらめき通信 vol.63

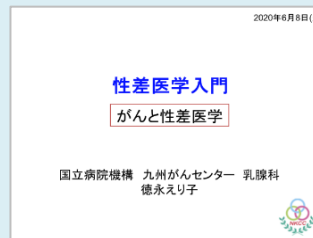
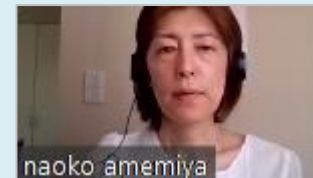
2021年7月(隔月発行)

## 性差医学に関する講義を行いました



6月1日と8日に、きらめきプロジェクトOGである、医療法人たかやま内科医院 院長 雨宮直子先生と国立病院機構九州がんセンター乳腺科部長 徳永えり子先生を講師として、性差医学に関する講義を行いました。女性外来や心療内科の立場から、また乳がん治療などの乳腺外科の立場から性差医療についてお話をしていただきました。昨年同様、対面式ではなく遠隔講義となりましたが、今年はコロナの状況も折り込んだ内容での授業となり、学生は興味深げに聴き入っていました。性差医療の大切さを学ぶ良い機会になったようです。

### 学生の感想(抜粋)



\* 普段の大学の講義では基礎医学を学ぶことがほとんどなので、今回の講義のような実際の疾患に基づいた内容は新鮮であったし、将来医師として働く自分をイメージするとともに、どんな医師を目指すべきかを考えさせられた。この時期にこのような講義を受けられてよかったと思う。

\* 最後に、開業をされている先生から見たコロナ診療について聞いたことが良かったです。

\* 自分の中では性によってこんなにも多くの病気に対しての違いが出てくるとは思わなかった。この講義を通して、性による違いを意識することができて非常に有益になった。

九州大学病院 臨床教育研修センター  
きらめきプロジェクト  
〒812-8582 福岡市東区馬出3丁目1-1  
TEL・FAX : 092-642-5203  
MAIL : kirapro@kirameki.med.kyushu-u.ac.jp  
URL : https://www.kiramekijp.kyushu-u.ac.jp/



## 日々頑張っている、きらめきプロジェクト所属のドクターを紹介します

卒後9年目の医師です。医師の夫と、保育園年長の娘がおり、現在きらめきプロジェクトに所属し2年目になります。大学卒業後、初期臨床研修のち入局し、1年間後期研修を行ったあとに卒後4年目で大学院へと進学しました。大学院4年目の次の進路を決める時期に、学位論文作成の真ただ中であつたことや、卒後も研究を頑張りたい（将来的には臨床医を目指しているが、現在行っている研究を継続し発展できるのは今しかない）気持ちがあり、大学病院に所属しながら研究もできるきらめきプロジェクトに応募しました。

きらめきプロジェクトに所属した昨年の春からは、研究室で研究を行いながら、週1回大学病院で外来勤務をしています。病院と研究室が隣接しているので行き来もしやすいです。そのおかげで、昨年無事学位論文が受理され、学位を取得することができました。研究は思うようにいかないこともあります。じゃあ次はどうしようと考えたり、実験データと病態との関連を考えたりと今後の自分のためにも引き出しをできるだけ増やしたいと思っています。週1回の外来勤務では、頼れる先生方と働くことができ、診療の相談に乗っていただいたり、患者さんを一緒に診ていただいたりと、臨床経験の浅い自分にとってありがたい環境だと実感しています。

研究に臨床に育児にとなんとかやってこれたのは、医局や研究室、きらめきの先生やスタッフの方々のご協力・ご理解と家族のサポートがあつてこそです。このような環境に感謝しながら、将来は一人の医師として様々な面で貢献できるように、今できることに集中し、研鑽を積んでいきたいと思っています。



宮崎宮のあじさいまつりにて

卒後15年目の医師です。きらめきプロジェクトには2020年4月よりお世話になっています。現在、きらめきプロジェクトメンバーの多くは仕事と育児に奮闘されている先生方ですが、私は介護理由でこのプロジェクトに参加させていただいています。

家族が「病気」になるのはとても大変なことです。「加齢」により様々な問題が生じたり支援が必要となったりするのも大変なことであり、またそれは特別なことではなく誰にでも訪れうることです。もともと、両親も他地方在住の義両親も高齢で持病がありましたが、一昨年、義父が誤嚥性肺炎による入院から認知症が急激に進み施設入所を余儀なくされ、母はがん末期で積極的治療が難しいことが分かり自宅療養を決める、等家族にとっての事件は突然同時期に発生しました。

母の在宅療養は訪問診療・訪問看護を受け、状態の悪化時は頻回の訪問や時には往診していただいたり、在宅酸素の導入や点滴などもしていただき、入院していなくても十分な医療を受けることができました。それよりも24時間隙間をあけることなく誰かが付き添い介護する状態を維持する事の方はかなり困難で、カレンダーとにらめっこしながら家族中で仕事や家庭のやりくりをし、なんとか一日一日ずつを過ごしたという感じでした。

残念ながら二人とも昨年他界し、今は、歩行困難な父の生活（家事や通院介助等）を支えながらの日々ですが、きらめきプロジェクトのおかげで、細々とですが大学病院での専門診療を継続しています。また、中断していた学位取得の準備も再開することができました。

介護で離職する人は年間10万人といわれていますが、介護者も完全離職せず何とか働き続けていけるよう、きらめきプロジェクトのような制度が更に広まり整っていけばよいと思います。